

# 授業言語分析法の意義と限界

— Sinclair の手法を用いて —

広島大学大学院 田邊祐司

## 1. はじめに

授業分析の発想が英語科にも導入されて以来、さまざまな分析法が提唱されてきた。教師と生徒が出合う教室の中で何が起っているかを知る道具である、このような分析法は、高梨によると5種類に大別される(18)。

- (1) 記号システム (2) 概念システム (3) 評定システム  
(4) フリー・カード法 (5) 授業言語分析法

本研究ではこの中で、筆者の知る限り比較的研究の乏しい授業言語分析法 (Classroom Discourse Analysis) を取り上げ、その特質を分析的に検討しようとするものである。

授業言語分析を定義して、高梨(19)は次のように述べている。

定量的に分析するよりは授業におけるコミュニケーションの単位やその流れを分析の対象とする。授業は、基本的には教師と生徒の相互作用である。その相互作用の主な手段である言語が、授業という場面の中でどのような特徴ある使われ方をしているかを分析することによって、授業に働く法則性を発見しようとするのである。

このように、授業言語分析法とは、授業中、教師・生徒間で交される言語を談話分析の立場からとらえ、そこから優れた授業を構成している要素とは何か、その基準とは何か等を明らかにし、授業改善に役立てよう(門田52)とする比較的新しい分野である。

## 2. 分析の目的・方法

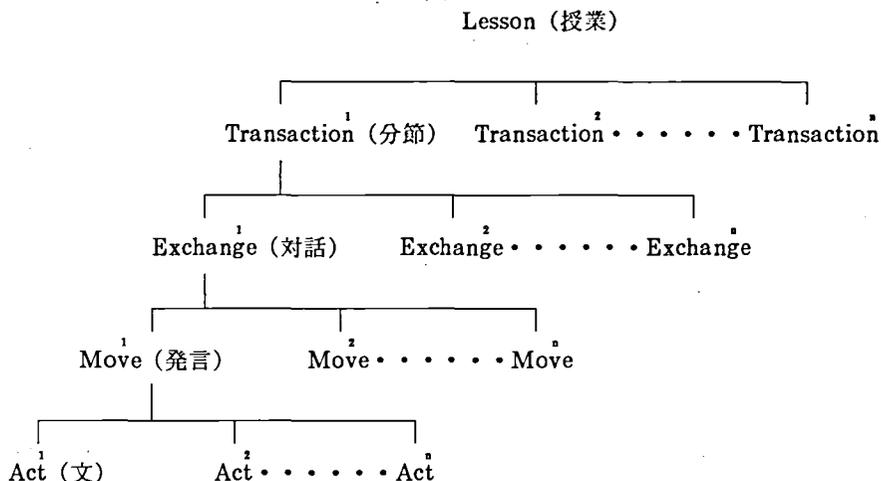
本研究では比較的整理され、体系づけられている、J. McH. Sinclair の授業言語分析法に基づいて、録画された3つの授業 (A)日本人熟練教師、(B)教生、(C)ビルマ人教師)を資料とし、教師・生徒間の相互作用の手段である言語を分析することによって、Sinclair の分析法の妥当性・信頼性を具体的に検討しようとするものである。

## 3. Sinclair 理論の概略

### 3.1. 対話の構成要素 (I-R-F 構造)

Sinclair は、図1のように授業言語を階層的に構造化している(54)。<sup>2)</sup>

図1



つまり、授業は複数の分節 (Transaction) から成り、分節はさらに複数の対話 (Exchange) から構成され、その対話は複数の発言 (Move) から構成され、そして、さらに発言は最小の単位である文 (Act) から成り立つと、Sinclair は考えている。

構成要素の中でも、Sinclair はとりわけ対話を重視し、対話は言語相互作用 (Language Interaction) の基本単位で、I-R-F (Initiation-Response-Follow-up) の構造を持つとしている。例えば、Who's that? - John. - Good. という対話では、Who's that? (教師の働きかけ・発問) が I, John. (生徒の反応・答え) は R, Good. (教師の反応・賞賛の言葉) は F に分類できるとしている。Sinclair によると、I は「質問を工夫し、指導をおこない、情報提示をすることによって、…授業を方向づけ、コントロールしようとするもの」(36)であり、又、F は「学習者の学習状況に関してフィード・バックを与えることにより、学習者に早い時期に訂正させ、誤った習慣を排除させ、困難点を発見させることを可能とするもの」(44)としている。

Sinclair は、Follow-up を 2 つのタイプ (Closed, Open) に分類し、それぞれに次のような具体例を示している (46)。

図2

Follow-up type	
Closed	Open
i. yes, good, etc.	i. rephrase
ii. repeat of part or whole of response	ii. extension
iii. plane change	

Closed type とは、教師が対話を、そこでいったん終止し、それ以上進展させない種類のものを意味し、yes, good 等の賞賛の言葉によるもの (ci), 生徒の答えを繰り返すもの (cii), 「その通り。今の山田君の答えは大切ですから、みんなノートに書いておきましょう。」といった指摘をする (plane change) もの (ciii), の 3 タイプに区分される。これに対して、Open type は、対話がさらに進展する可能性を持つ種類で、生徒の答えを他の言葉や表現で置きかえるタイプ (oi), そして答えに対して教師が自らの意見等を述べるタイプ (oii) の 2 つのタイプに分けられる。

以下, Sinclair(46)にある具体例を示しておく。

図 3

Initiation	Response	Follow-up	(type)
Who is the first President of America? (アメリカの初代大統領は誰ですか。)	George Washington.	That's right. (その通り。)	(ci)
	(ジョージ・ワシントンです。)	George Washington. (ジョージ・ワシントンだね。)	(cii)
		There's a city named after him. (ワシントンにちなんで名づけられた街があります。)	(oii)

### 3.2. Teacher Talk の分析

I-R-F 構造と並んで, Sinclair は教師の授業言語, いわゆる Teacher Talk を量的に, 簡潔に分析するマトリックスも提起している(25)。

図 4

	1 Telling (情報提示)	2 Controlling (授業操作)	3 Stimulating (発問)	4 Rewarding (賞賛)
a Content (授業内容)				
b Organization (授業構成)				
c Discipline (授業規律)				

これに従うと, 例えば「奇数と奇数を足すと必ず偶数になります。」という発話は, 情報伝達 (Telling) ・内容 (Content) 欄にあてはまり, その分類記号は 1 a ということになる。

以下, Teacher Talk の分類方法の具体例を示すことにする(25)。

図 5

Full list of combinations :

- 1 a. The sum of two odd numbers is always an even number.  
(奇数と奇数を足すと必ず偶数になります。)
- 2 a. Repeat after me...  
(繰り返しなさい……)
- 3 a. What is the capital of India ?  
(インドの首都はどこですか。)
- 4 a. Yes, that's a good answer. Just right.  
(はい, その通りです。正解!)
- 1 b. Today we are going to discuss the Civil War in England.  
(きょうはイングランドの清教徒革命について勉強をします。)
- 2 b. During the lesson, think all the time about what it was like to live during the Civil War.

(授業中、清教徒革命下の人々の暮しぶりがどんなものだったか、常に頭に入れておきなさい。)

3 b. Do you remember what we did yesterday about Charles II?

(昨日、チャールズII世について学んだことを覚えていますか。)

4 b. Yes, we'll be doing that next week.

(そうですね、それについては来週考えてみることにしましょう。)

1 c. Anyone who wants to enrol for... [sic]

(～をやってみたい人はいますか。)

2 c. Pay attention.

(さあ、こっちを向いて。)

3 c. Are you feeling all right?

(大丈夫ですか。)

4 c. Thanks, that's better.

(はい、ありがとう、その方が良いですね。)

このように、Teacher Talk をその構造・機能に分類し、それぞれの頻度数をマトリックスで数量的に示し、教師の授業言語の特徴をさぐろうとするのが、この分析法である。

### 3.3. 対話の構造・機能分析

最後に、Sinclair 理論のまとめともいうべきマトリックスを概括する(図6)。これも Teacher Talk の分析表同様、授業言語をその構造・機能に分類するものであるが、その範囲を、I-R-F 構造を中心に、教師・生徒間の対話に拡大したものである(76, 82)。

図6

Syntactic structure	Initiation	Response type	Fit response	Response structure
Declarative	Informing	A	Acknowledgement	Engage
Interrogative: Positive Polar	Eliciting: Decision		Decision	
Interrogative: Negative Polar	Eliciting: Agreement	B	Agreement	Engage-head
Interrogative: Tag				
Interrogative: Wh-word	Eliciting: Content	C	Content	(Engage) head
Imperative	Directing			

Initiation Syntactic structure						
D	IPP	INP	IT	IWH	IMP	Other

Response type				Response notes	Follow-up	Exchange notes
A	B	C	D			

D : Declarative  
 IPP : Interrogative Positive Polar  
 INP : Interrogative Negative Polar  
 IT : Interrogative Tag  
 IWH : Interrogative Wh-word  
 IMP : Imperative

この表に従うと、次のような I-R-F 対話の構造・機能分析が可能になる。

図7

I		R			F
What did we study yesterday?		We studied the Civil War in England.			Yes, we studied the Civil War in England.
Syntactic structure	Initiation	Response type	Fit response	Response structure	Follow-up type
IWH	Eliciting: Content	C	Content	head	cii

なお、この図と、Appendix の I-R-F 構造の対話分析例は、筆者が図 6 を便宜上、若干修正したものである。

#### 4. 分析結果

本研究においては、先に述べた Sinclair 理論に基づき<sup>3)</sup>、3つの授業における、(1)Teacher Talk (日本語・英語)の数量的分析、(2)教師・生徒間の相互作用(日本語・英語)の数量的分析、及び、(3)I-R-F 構造をもつ教師・生徒(個人)間の対話(英語)の質的分析をおこなった。ただし、相互作用の手段である言語は、わが国の場合、母語であることが多く、本来なら日本語による対話の質的分析も当然考えなければならないが、Sinclairにはこれに関しての言及がなく、又、筆者の時間的都合もあって、質的分析は英語による対話のみに限定したことを付記しておく。

##### 4.1. Teacher Talk の数量的分析

この分析は、Teacher Talk の構造・機能を量的に表すことによって、教師の生徒に対する働きかけの特徴を浮き彫りにしようとするものである。分析に当たっては、前述のマトリックス(図4)を使い、各項目にあてはまる発話の頻度数を数量化し、記入した。その際、Sinclairでは考慮されていなかった日本語の分析も共に試みた。この問題は、先に述べたように、わが国の英語教育の現状を踏まえた時、必要だと考えられたからである。以下は、(A)日本人熟練教師、(B)教生、及び、(C)ビルマ人教師の Teacher Talk の分析結果である。

図8 (Jは日本語、Eは英語を表す。)

(A)

	1 Telling	2 Controlling	3 Stimulating	4 Rewarding
a J	12	25	9	61
Content E	71	31	32	8
b J	2	7	1	
Organization E		8	4	
c J	1	1		
Discipline E		2	4	4

(B)

	1 Telling	2 Controlling	3 Stimulating	4 Rewarding
a J	45	23	34	5
Content E	8	8	4	4
b J		3	3	
Organization E				
c J		8	1	
Discipline E				

(C)

	1 Telling	2 Controlling	3 Stimulating	4 Rewarding
a J	1		1	1
Content E	4		87	43
b J	1	1	1	
Organization E		5		
c J		2		
Discipline E				7

この比較から、それぞれの授業の特徴として、次のことが明らかになった。まず、日本人熟練教師については、次のことがいえる。

- (1) 積極的な英語使用が見られるが、大切なポイントは日本語で押さえている。
- (2) 賞賛の言葉が多く、常に生徒の反応に敏感である。(特に4 a)
- (3) 授業を構成したり、コントロールする言語も英語であることが多く、Classroom Englishの徹底がうかがわれる。
- (4) 発言の分布が、マトリックス上の広範囲に及んでいることから、熟練教師が授業の諸側面に気を配っていることに気づく。

一方、教生の授業については次のようなことが、いえるであろう。

- (1) 少ない英語使用。
- (2) 日本語による情報提示中心の授業で、教師がしゃべり過ぎる傾向がある。(特に1 a)
- (3) 賞賛の言語が少なく、生徒の反応に対して、熟練教師ほど敏感でないことがわかる。
- (4) 授業を構成、コントロールするのにも、日本語が多く、英語の授業の雰囲気作りが見られない。
- (5) 発問にも日本語が多く、積極的に生徒と英語で対話をしようという姿勢がない。

即ち、熟練教師の指導と比べた時、教生の授業は日本語を多用した、一方通行の授業であり、授業中の視野もかなり狭いことが、分析結果より想像されるのである。

他方、2人の日本人の授業に対して、ビルマ人教師の場合はどうであろうか。この授業は教材もない特殊なケースであり、正しい意味での比較はできないかもしれないが、参考のために取り上げてみた。その結果は以下の通りである。

- (1) 英問英答中心の授業であることがわかる。
- (2) 賞賛の言葉が圧倒的に多く、生徒に自信を持たせようとしている。
- (3) 英語を聞くために生徒が集中しているためなのか、授業規律に関する発言が少ない。
- (4) 生徒がわかるまで、質問を繰り返すからであろう、発問の頻度数が非常に高い。

このように Teacher Talk を数量的に分析すると、それぞれの教師の持つ、特性、経験、ストラテジー等が、言語を通してわれわれの前に、大まかなものではあるが浮び上がってくるのである。

#### 4.2. 教師・生徒間の相互作用の数量的分析

2番目の分析では、(1)あらゆる教師・生徒(全体・個人)間の相互作用(日本語、英語を問わず、コーラル・リーディング等も含む)を数字にして示し、さらにその中から、(2)教師・生徒(個人)間の対話(日本語、英語)を選び出し数量化を試みた。そして、(3)この対話の中から、われわれが目標とする理想的な言語活動として成立していると思われる、I-R-F構造の対話

(英語)を数量化してみた。図9が、その分析表である。

図9

		(A) 日本人 熟練 教師	(B) 教 生	(C) ビルマ 人教師
(1)	教師・生徒（全体・個人）間の相互作用総数（日・英）	77	68	57
(2)	教師・生徒（個人）間の相互作用数（日・英）	35	27	21
(3)	教師・生徒（個人）間のI-R-F対話数（英）	8	2	17

この分析の結果として、次のことがいえるであろう。

- (1) 日本人熟練教師及びビルマ人教師による授業を比べると、図の(1)においては、日本人教師の方が相互作用総数で上回っているが(A)77、(C)57、(3)のI-R-F構造(英語)の対話数に目を移すと、ビルマ人教師の方が多いことがわかる。このことは、いかに熟練教師といえども、英語による生徒とのコミュニケーションが不足しており、わが国の英語教育における重大な問題とも関連していることを示唆している。
- (2) 教生の授業では、全体的な相互作用総数は68と2番目に多いが、これはコーラル・リーディングが多いためであり、教師・生徒(個人)間の相互作用数は27と少ないことがわかる。I-R-F対話(英語)にいたっては、2例しかなく、英語によるコミュニケーション活動が、相互作用総数の割には不足していることがわかる。
- (3) I-R-F構造の対話(英語)が多い(17)、ビルマ人の授業は、教生の授業とは対照的に、コミュニケーション中心の授業である。

この相互作用の数量分析からいえることは、日本人教師、教生による授業では、Sinclairの提唱するコミュニケーション成立の基本である、I-R-F対話が少なく、したがって、純粋な目標言語によるコミュニケーション活動がビルマ人教師の授業と比べて、著しく不足しているという事実である。

それでは、I-R-F構造対話の頻度が高ければ、高いほど授業はコミュニケーション活動という点で、活性化されるのだろうか。さらには、目標言語である英語によるI-R-F対話が増加すれば、わが国の英語教師の最大の関心事である言語活動も、多いに活性化されるのだろうか。この点に関連して、次の分析では、このI-R-F構造の対話を、質的観点から、もう少し掘り下げてみることにした。

#### 4.3.1-R-F構造の対話(英語)分析

ここでは、前述の結果を踏まえ、I-R-F構造の対話の増加が、教師・生徒間のコミュニケーション活動の活性化にどうつながるのか、という点に関して、Sinclairの分析方法を用いて、それぞれの授業における英語による対話に焦点を絞って、分析を試みた。(対話例については、Appendixを参照。)

この分析の結果として、次のことがいえるであろう。

- (1) 一般に教師が、生徒から decision (Response type A) や agreement (Response type B) だけを求める種類の initiation で対話を始めても、コミュニケーションという観点からは、発展性がないことがわかる。この種の initiation (例えば Do you know~? や Is this~? 等の質問) は、教材の内容理解度をチェックしたり、ウォーム・アップやレディネスを狙う時には効果的かもしれないが、目標言語による純粋なコミュニケーション活動を狙う時には、生徒から Yes, I do. や No, I don't. 等の laconic な答えだけを引き出すだけでは満足でき

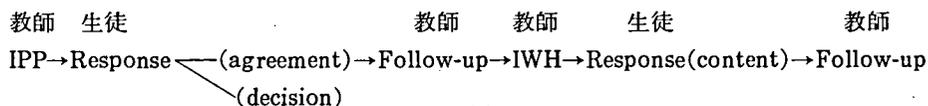
ないことは明らかである。

- (2) (1)で述べた形態の initiation とは対照的に, decision や agreement の先にあるものを, 生徒から引き出そうとする教師は, wh-疑問文 (IWH) の initiation を多用している。例えば, 日本人熟練教師による授業(A)の③の対話 (Appendix 参照) は, この点で理想的な言語活動を成立させていることがわかる。
- (3) フォロー・アップにおいて, お決りの賞賛の言葉を与えるだけではなく, 生徒の答えに対して, 自分の感情なり, 意見なりを自然にフォローさせ (Open type), 対話の流れにそって新たな関連発問をすることによって, 対話を延長させている。。これは純粋なコミュニケーションの成立に大きくかかわっているといえる。(Appendix 対話例, (A)①, (A)③, (B)の②を参照。) これは教師自身の英語の運用能力が問われる作業でもある。

以上のことから結論づけられることは, 英語によるコミュニケーション活動の活性化のために, I-R-F 構造の対話数増加と共に, 特に initiation 及び follow-up の仕方を教師はもう少し教育的に考える必要があるのではないかということである。理想としては, 教師はいきなり生徒から content を引き出すのではなく, まず Response type (A) decision, 及び (B) agreement を求める initiation から始め, 生徒の反応を待って, それに必ず適切な賞賛の言葉を与え, さらに discourse にそって, 再び wh-question の initiation へと発展させる形を取ることが望ましいことを, 分析結果は示している。このように, 発問にも, 生徒の情意面を考えた, 教育的な順序性が配慮されなければならないのではないだろうか。

即ち, 生徒が目標言語で, 自発的に自らの「こころ」を打ち明けてくれる——そんな純粋で, パタン・プラクティス的ではないコミュニケーション活動の成立のカギを, I-R-F 構造による対話の分析はわれわれに示唆しているように思える。Sinclair の分類記号を使えば, このような対話のプロト・タイプは次のようになろう。

図10



## 5. 結論 Sinclair 理論の意義と限界

以上, Sinclair 理論に拠りながら, 3つの授業の授業言語を分析してきたが, これらの結果から次のことが, この分析法の意義として, 帰納されるであろう。

- (1) Teacher Talk の分析は Sinclair 理論の中核ではないが, この分析により, 大まかな授業のプロフィールを客観的につかむことができる。
- (2) 教師・生徒間の相互作用の数量的分析により, 相互作用総数に対して, 教師・生徒(個人)間の相互作用(日・英)の割合が量的に把握できる。さらに, この I-R-F 対話の目標言語における頻度数によって, 目標言語によるコミュニケーション活動が, 実際にどれほどおこなわれたか客観的なデータを得ることができる。
- (3) I-R-F 対話の質的分析により, 教師・生徒間の構造・機能, つまり談話構造を客観的に知ることができ, 又, 授業の中心的構成要素である対話の質をより科学的に整理することができる。
- (4) 目標言語によるコミュニケーション活動を活性化するカギは, 教師の initiation 及び, follow-up の仕方にあることを示唆している。

以上が分析の結果, 得ることのできた Sinclair 理論の英語教育学の意義であるが, このことは

同時に、このアプローチの限界をも示唆しているように思える。

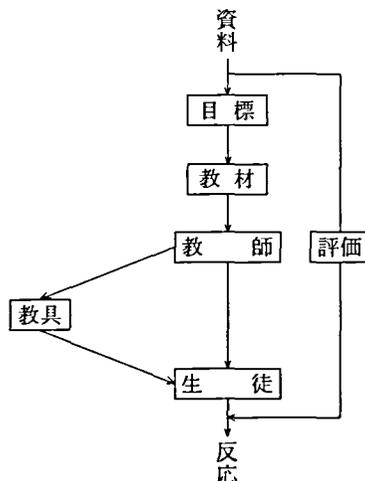
それは、つまり、Sinclair 理論は授業言語を教授目標、教材等を捨象した形で類型化しようとするものであり、教育学的な本質を見逃しているのではないかということである。その授業の教授目標、授業内容、授業形態、評価、生徒の能力、情意面等の教育的変数と無関係に、I-R-F 構造だけを前面に押し出して、授業を論じてゆくアプローチには無理があるのではないだろうか。このことに関連して吉本(131)は、授業における応答的コミュニケーションは無目的、無方向的に展開される「自由対話」ではなく、一定の目標と一定の教科内容に方向づけられなければならないと論じている。この指摘は無論、Teacher Talk 及び、教師・生徒間の相互作用の量的分析を考える時にも、考慮されなければならない。

このような観点に立てば、英語科の授業を評価し、改善するために重要なことは、単に I-R-F 構造の対話の頻度に関する情報よりも、その I-R-F の談話単位が教授目標とどのような形でかかわっており、又、それが生徒の学習達成、動機づけにどのような影響を与えたかという点に関する情報ではないだろうか。

この問題点を克服するためには、授業の中の I-R-F 構造（これは母語、目標言語によるもの双方を含む）を授業目標とのかかわりで記述し、教授・学習過程の中で評価し、学習者の実態も考慮に入れた、新しい分析システムが必要なのではないだろうか。これが授業言語分析のもつ限界と課題のように思える。

#### 〔注〕

- 1) 授業分析研究の集大成である金田編(1986)にも、この分析に関する記述は少ない。
- 2) この図は、多少手直ししたものである。
- 3) これら一連の分析は、便宜上筆者が Sinclair を若干修正しておこなったものである。
- 4) 五十嵐(1981)も問答法の順序性の教育的意義について、重要な指摘をしている。
- 5) 同じ観点から、土屋(14)も以下のような図でこの関係を表している。



#### 〔参考文献〕

- Sinclair, J. McH., and D. Brazil. Teacher Talk. Oxford: Oxford University P, 1983  
五十嵐二郎「指導過程の実際」『新・英語科教育の研究』 東京 大修館 1985, 188-194.

- , 『英語授業過程の改善』 東京 大修館 1981
- 小篠敏明 「11英語科教育学の授業実践」 『教科教育学研究-第2集-』  
(日本教育大学協会研究促進委員会, 1985), pp. 219-241.
- 門田幹夫 「3. 英語科における授業分析の応用」 『英語教育』7月増刊号(1984)大修館,  
51-52.
- 金田道和編『英語の授業分析』 東京 大修館 1986
- 高梨康雄 「授業分析-「英語授業学」の構築を目指して-」 『英語教育』30, No.1 (1981)  
大修館, 18-20.
- 土屋澄男 「日常的授業研究の視点」 『英語教育』25, No.12 (1977) 大修館, 12-14.
- 吉本 均 『授業をつくる教授学キーワード』東京 明治図書 1986

[Appendix]

(授業) No	Initiation Syntactic Structure	Initiation	Response(type)	Follow-up	Exchange notes
(A) ①	What time did you get up this morning? (IWH)	Eliciting Content	I got up at...the...,at seven twenty.(C)	Seven twenty! Too late! (cii)(oii)	ウォームアップとして、生徒の responseに自然に応じている。
(A) ②	Do I look pretty today, .....kun? (IPP)	Eliciting Agreement	Oh,yes!(laughter)(B)	Oh! Oh!(laughter) (ci)	ウォームアップ。英語でのジョークが雰囲気を作っている。クラス一同大笑。
(A) ③	Have you ever been to Europe? (IPP) What country did you go to? (IWH)	Eliciting Precision Eliciting Content	Yes,I have.(A)  I want to England or...Ger...,Germany and Switzerland.(C)	Switzerland! I want to go to Switzerland. (cii)(oii)	本文に関連して、生徒から自然な responseを引き出している。 made-upでない exchangeの典型的な例。
(A) ④	じゃあS君! Do you have a watch made in Switzerland? (IPP)えっ! あなた! youよ!	Eliciting Decision	No. (A)	No? はい, Ok. (ci)	せっかく本文に関連して、生徒の個人的な事柄を聞き出しているのに、発展性がない。
(A) ⑤	Did he give any presents to his family? .....san? (IPP)	Eliciting Decision	Yes,he did. (A)	Yes,he did.(cii) Ok. (ci)	本文理解確認の質問。英語でなされているが真のコミュニケーションな対話はここからもう一歩踏み出すことでは。
(B) ①	What sports do you like? (IWH) Do you like...Do you like studying? (IPP) What do you like? Girls? (IWH) (IPP)	Eliciting Content Eliciting Agreement Eliciting Content	I don't like sports very much. (C) No. (B)(laughter)  (laughter)	I see. (ci)	ウォームアップとして。クラス爆笑となつて良い雰囲気は作っているが、生徒がせっかく最初は自然に答えたのに、initiationの仕方によって、答えにくくしている。 もう少し自然な follow-upも欲しい。
(B) ②	Do you like baseball? (×2) (IPP) What team do you like? (IWH)	Eliciting Agreement Eliciting Content	Yes,I do. (A)  I like the Hankyu Braves.(C)	Oh. Hankyu Braves?(cii) (laughter) たぶん養田が好きなんだな。(oii) I like the Fighters (oii) very much.(oii)	ウォームアップ。自然な exchangeが成立しているが、教生によくある自分だけの意見を述べて follow-upが終わっているのが残念である。
(C) ①	When do you go to school? (IWH)	Eliciting Content	I go to school at seven. (C)	I go to school at seven.(cii)Seven o'clock. どちらでもいいです。(oii)	生徒の responseを必ず大きい声で繰り返して、クラス全体にフィードバックしており、答えた生徒にも自信をつけている。
(C) ②	You, when do you have your lunch? (IWH)	Eliciting Content	I have my lunch at one. (C)	I have my lunch at one.(cii)Or I eat my lunch at one.(oi)We can use 'eat'.(oii)	他の exchangeのほとんどが、この①、②のような形である。生徒の responseから、さらに発展させる initiationがあれば、もっと良い。